

2020年度推薦入学選考（11月12日実施）

国語分野問題

（〈国1〉ページ～〈国12〉ページ）

I

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

柳田国男が民俗学に向かった時期、「怪談」が流行し、また、「妖怪」のブームがあった。しかし、彼が民俗学に向かい、「山人」に関心を抱いたのは、そのためではない。また、それは先住民が山に残っているという観点からだけでもなかった。彼は一九〇〇年に大学を卒業したあと、農商務省・法務省の役人として、実際に「山」にかかわったのである。

この時期に妖怪のブームを起したのは、柳田ではない。『妖怪学』を書いた井上圓了^{えんりょう}である。近年、井上圓了といえば、妖怪の研究者で、漫画家水木しげるの大先輩のような人だと考えられている。しかし、彼は明治初期には、井上哲次郎と並ぶ哲学者であった。そして、彼が「妖怪学」という講座を開いたのは、哲学を民衆に説く方便として、である。妖怪といっても、お化けの類ではなく、今なら人が幻想と呼ぶものに相当する。例えば、国家は共同幻想だというかわりに、国家は妖怪だというようなものだ。

とはいえ、圓了はいわゆる妖怪を徹底的に調査し、文学的装飾なしにそれを記録した。現在、日本の漫画・小説などで引用される妖怪はほとんど、圓了の著作にもとづいている。彼は、妖怪が幻想であることを人々に説いてまわった。その意味で、彼は **A** 主義者であった。しかし、妖怪を全面的に斥けたのではない。

彼の考えでは、妖怪にはいくつかの種類がある。いわゆる妖怪は仮象であり、自然科学によって真相を解明できる。 **あ**、そのような仮象が除かれたあとに、人は真の妖怪（真怪）に出会う。それは、この自然世界そのもの、カントでいえば物自体である。実は、圓了は、明治の浄土真宗から出てきた宗教改革者だった。そして、彼は仏教的認識を、哲学として、さらに、それを妖怪学として語ろうとしたのである。彼は大学を出た後、どこにも属さず、自分で学校（後に東洋大学）を創設した。型破りの人物であり、むしろ彼自身が妖怪であった、といえる。

圓了が妖怪を捜し回ったのはなぜか。妖怪が真の仏教的認識（真怪）を妨げるからだ。しかし、真の仏教的認識を妨げているのは、現に存在する寺院仏教である。それこそが否定すべき妖怪なのだ。つまり、圓了の妖怪論は、仏教における宗教改革にはかならなかった。ところが、彼の意図を超えて、妖怪論がブームとなったわけである。

一方、柳田国男は圓了の妖怪論を嫌った。それは妖怪についての見方が違ったからである。ただ、ある意味で、類似したことを考えて

いたともいえる。圓了は、妖怪を眞の仏教的認識（真怪）から墮落した形態だと見なした。一方、柳田の見方では、妖怪とは、かつて神的存在であったのに、仏教のような宗教が到来したために追われて零落した存在である。

柳田はそのような考えを、ハイネの『流刑の神々』から学んだといっている。《我々が青年時代の愛読書ハインリッヒ・ハイネの『諸神流竄記』などは、今からもう百年以上も前の著述であったが、夙にその中には今日大いに發達すべかりし学問の芽生を見せている》（『青年と学問』）。ハイネの考えでは、ヨーロッパのゲルマン世界にキリスト教が入ってきたために、森に遁れた従来の神々が妖怪になった。柳田はそれを日本に応用して、『二つ目小僧』を書いた。つまり、「二つ目小僧」などの妖怪は、仏教に追われて隠れた古来の神々だということである。

柳田は各地で山人を探索しようとしたが、見出したのは、天狗や妖怪のような伝承だけであった。 い、それらは村人の「共同幻想」として片づけられた。しかし、柳田はそこにこそ、山人、あるいは固有信仰を見ようとしたのである。

山人を追求する過程で、彼は「山の人生」、すなわち、山地に生きる民の生態について、より詳細な知識を得た。例えば、『山の人生』では、マタギやサンカ、焼畑農民、その他の漂泊民について書かれている。むろん、彼らは山人ではない。したがって、柳田は彼らを、山人と区別して山民と呼んだ。なお、音声上紛らわしいので、以後、山民を山地民と呼ぶことにする。

私の考えでは、山人は原遊動民であり、山地民はいちど平地に定住した後に遊動民となった人たちである。山人と山地民の違いは、彼らの平地民に対する関係において明瞭になる。山地民はかつて平地に定住したことがあるだけでなく、また、その後も何らかのかたちで平地と関係する。そして、彼らの平地民に対する態度はアンビヴァレント（両面的）である。すなわち、敵対性と同時に依存性、軽蔑と B が混在する。

一方、山人は平地民によって、しばしば天狗や仙人として表象される。それは畏怖すべきものではあるが、敵視されるようなものではない。彼らは平地民に対して、特に善意がないとしても、悪意もない。 う、山人は自足的であり、平地民に対して根本的に無関心なのだ。ゆえに、山人に出会うことは至難である。

柳田はまた、山人を探る手がかりを、日本の植民地統治下にあった台湾の原住民に求めた。彼らはもともと中国・東南アジアの山岳地帯から移動してきて、一度平地に定住した人たちである。彼らが大陸から侵入してきた漢族に追われて山に遁れたのは、一六世紀である。

したがって、柳田はついに山人の存在を確認できなかったが、山地民の中に、その痕跡を見出した。(①)

例えば、彼が農商務省の役人として調査のために訪れた宮崎県椎葉村で見た焼畑・狩猟民がそうだ。彼らはすでに農業技術をもっている。それは、彼らがかつて平地にいたことを証すものである。彼らはたえず平地民と交易している。このように、山地民は、平地民と深い関係をもつ点で、原遊動民である山人とは違っている。(②)

椎葉村で柳田が驚いたのは、『彼等の土地に対する思想が、平地に於ける我々の思想と異って居る』ことである。柳田にとって貴重だったのは、彼らの中に残っている「思想」である。柳田は農政学者として協同組合について理論的に考えてきたが、ここに、「協同自助」の実践を見出した。それは「ユートピア」の実現であり、「一の奇蹟」であった。「富の均分というが如き社会主義の理想」が実現されていたからだ。

彼らの場合、共同所有と生産における「協同自助」は、焼畑と狩猟に従事するということ、つまり遊動的な生活形態から来るものである。そこに、遊動的な山人の名残りが濃厚にあるといえる。柳田に感銘を与えたのは、そのことである。彼が「山人」について書き始めたのは、椎葉村を訪れたあとである。したがって、彼が「山人」に関心を抱くようになったのは、妖怪や天狗のような怪異譚のためではない。柳田が驚いたのは、農民の協同組合を要とする彼の農政理論において目指していたものが、現にそこにあつたからだ。(③)

それから間もなく執筆した『遠野物語』の序文に、柳田はこう記した。《国内の山村にして遠野よりさらに物深き所にはまた無数の山神やまのかみ山人の伝説あるべし。願わくは之を語りて平地人を戦慄せしめよ》。この激越な序文は、椎葉村での認識から来ている。したがって、これは、当時ブームとなった妖怪、すなわち、お化けの類によって平地民を戦慄させることではありえない。妖怪といっても、それは、マルクスが『共産党宣言』の冒頭で書いたような妖怪である。「一つの妖怪がヨーロッパをさまよっている——共産主義の妖怪が。旧ヨーロッパのあらゆる権力が、この妖怪を退治するために神聖な同盟を結んでいる」。

え、つぎのような事実がある。マルクス(一八一八—一八八三)はハイネ(一七九七—一八五六)と一八四三年から二年ほど、亡命先のパリで親しくつきあった。ハイネが『流刑の神々』(一八五三年)を構想したのは、この時期である。また、一八四八年にマルクスはエンゲルスとともに『共産党宣言』を刊行した。その意味では、二つの異なる「妖怪」は同じ源泉をもつといってもよい。(④)

柳田国男は長期にわたって多くの仕事をしたが、一貫して抱いていた主題は山人である。彼はそれについて、主として『遠野物語』(一

九一〇年)や『山の人生』(一九二六年)で語ったが、その後はほとんど語らなくなった。そのために、山人への彼の関心は、若い時期のロマン派的な関心であり、また、それらの仕事が照明したのは、山人の有り様よりも、それを表象する村人の「共同幻想」(吉本隆明)であると考えられるようになったのである。

しかし、柳田は、常民あるいは農民大衆の心性を探求したことは事実であるが、山人を彼らの共同幻想に還元したりはしなかった。その逆に、彼は歴史的な実在としての山人を生涯追いつけたのである。柳田は、山人は日本の先住民で、稲作を行う人々が到来したあと山地に逃れた者であるという仮説を立て、それを実証しようとした。ところが、それを示す史料は神話しかない。例えば、国くにつ神が天あまつ神に追われたというような。ゆえに、柳田はそれを民俗学的な調査によって果たそうとしたのである。

柳田は「山人」が実在すると考えたが、それを実証することはできなかった。彼が見出したのは「山民」(山地民)だけである。そのため、彼は初期から唱えていた説を引つ込めるほかなかった。その後の柳田は、非農業民を無視し、もっぱら平地の農民を「常民」として扱うようになったと批判されている。また、日本人の民族的・文化的多数性を無視するようになったと批判されている。

このような見方に私は賛同できない。柳田は「山人」あるいは「やまにある古い日本」を放棄したわけではない。南方熊楠などの学者らに批判されて、洪々引つ込めただけである。柳田は初期にこう述べた。《現在の我々日本国民が、あまた数多の種族の混成だということは、実はまだ完全には立証せられたわけでもないようではありますが、私の研究はそれをすでに動かぬ通説となったものとして、すなわちこれを発足点と致します》(『山の人生』)。彼はこの「発足点」を一度も放棄しなかったといつてよい。

柳田は一九三五年に「一国民俗学」を唱えた。しかし、それはナショナリズムを唱えることではなく、むしろその逆である。この時期、柳田の弟子を中心とする、民俗学の学者らが、日本の大陸侵攻に呼応するかのようになり、「比較民俗学」を唱え始めた。そこには、各民族文化の **C** を保持しながら統合するという「大東亜共栄圏」のイデオロギーがあった。それは国際性を掲げるナショナリズムにすぎない。柳田が急に「一国民俗学」を唱えるようになったのは、それに **D** を唱えるためである。

赤坂憲雄は『東北学／忘れられた東北』で、柳田が山人を否定することによって「一つの日本」を作ろうとしたと批判し、それに対して、日本文化の **C** を強調した民族学者の岡正雄の意見を持ってきた。岡の考えでは、日本民族・日本文化は、この列島に渡来してきた者によって複合的・重層的に形成された。《日本固有文化は、南中国、江南地域、インドネシア方面から渡来したいくつかの農耕民文

化の分厚い地盤の上に、支配者文化が被覆してできあがった混合文化であるといつてよい》。

しかし、岡正雄はそのような説を、柳田を批判するために立てたのではない。それは本来、柳田の「発足点」を受け継ぐ考えであった。だからこそ、彼は一九二五年、まだ二七歳の新進学徒であった時期に、柳田に抜擢されて雑誌『民族』を共同編集しえたのである。その後、岡はウィーンで学び、帰国後、国策機関である民族研究所を設立した。それは日本の戦時体制（大東亜共栄圏）に合致し、かつ、ナチズムとつながる「比較民族学」を広布するためであった。柳田はそれを拒否して「一国民俗学」を唱えたのである。

（出典 柄谷行人『世界史の実験』なお問題の作成上、一部省略をしてある。）

問1 空欄 **あ** **え** に入れるのに最も適当なものを、それぞれ次の中から一つ選び、番号をマークしなさい。

- あ ① 確かに ② 加えて ③ しかし ④ たとえば
- い ① ゆえに ② まるで ③ 確かに ④ 一方で
- う ① あたかも ② しかるに ③ ところで ④ 要するに
- え ① 結局 ② ちなみに ③ そこで ④ 従って

問2 空欄 **A** **D** に入れるのに最も適当なものを、それぞれ次の中から一つ選び、番号をマークしなさい。

- A ① 啓蒙 ② 博愛 ③ 社会 ④ 自然
- B ① 同情 ② 排除 ③ 屈折 ④ 羨望
- C ① 神秘性 ② 多様性 ③ 合理性 ④ 特異性
- D ① 賛同 ② 念仏 ③ 異議 ④ 祝意

問3 本文中、次の一文が省略されている。(①)～(④)のどこに入れるのが最も適当か、番号をマークしなさい。
だが、山地民も遊動性をもっており、そのことが、平地の定住民にないような社会的特質を与えている。

ケ	ク	キ	カ	オ	エ	ウ	イ	ア
---	---	---	---	---	---	---	---	---

問4 ——線「椎葉村での認識」とはどのようなものであったのか、最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号をマークしなさい。

コ

- ① 原遊動民である山人とは異なる山地民が平地と関係するあり方が、椎葉村の人々の土地に対する思想と共通していること。
- ② 仏教に追われて隠れた古来の神々の末裔である山人の、山神山人の伝説が椎葉村に残っていること。
- ③ 山人の名残が濃厚な遊動的な椎葉村の生活形態に、平地の定住民にはない協同自助の実践を見たこと。
- ④ 山地民と平地民の両方の生活習慣をもつ椎葉村の村人に、失われた山人の痕跡を見たこと。

問5 本文の内容に合うものを、次の中から二つ選び、番号をマークしなさい。ただし、解答の順序は問わない。

シ サ

- ① 柳田国男は、「妖怪」は自然世界そのものであり、真の仏教的認識を妨げると考えた。
- ② 柳田国男は、古来の神々が仏教に追われて零落し、妖怪になったと考えた。
- ③ 柳田国男は山人について興味を持ち、「共同幻想」として片づけられる伝承から実態を解明した。
- ④ 柳田国男は山人が実在すると考えたが、実証できず、ついに論を放棄した。
- ⑤ 柳田国男は「一国民俗学」によって、当時のイデオロギーに後押しされて「一つの日本」を実現しようとした。
- ⑥ 柳田国男は、日本国民は数多の種族の混成により形成されたと考えていた。

II

次の1～5の説明に当てはまらないものを、それぞれの選択肢の中から一つ選び、番号をマークしなさい。

1 明治時代末に文壇を風靡した自然主義文学に対して反対する立場をとった作家。

① 夏目漱石

② 島崎藤村

③ 森鷗外

④ 永井荷風

2 『白樺』に拠って人道主義にもとづいた作品を発表した作家。

① 志賀直哉

② 武者小路実篤

③ 有島武郎

④ 国木田独歩

3 海外の詩作品を紹介し日本の近代詩に影響を与えた訳詩集。

① 森鷗外『於母影』

② 三好達治『測量船』

③ 上田敏『海潮音』

④ 堀口大宇『月下の一群』

4 敗戦後の混乱期に反俗、反社会、反道徳的言動で時代を象徴し、無頼派と称された作家。

① 太宰治

② 横光利一

③ 織田作之助

④ 坂口安吾

5 『今昔物語集』や『宇治拾遺物語』といった古典作品に題材をとった芥川龍之介の作品。

① 『河童』

② 『芋粥』

③ 『鼻』

④ 『地獄変』

チ

タ

ソ

セ

ス

Ⅲ

次の1～5について、適切なものをそれぞれの選択肢の中から一つ選び、番号をマークしなさい。

1 「今回は成功しなかったが」を期したいと思う」の空所に当てはまる四字熟語

- ① 一路平安
- ② 率先垂範
- ③ 牽強付会
- ④ 捲土重来
- ⑤ 表裏一体

2 「朝三暮四」の意味としてふさわしいもの

- ① 規則正しい生活をする事
- ② うまいことを言って人をだます事
- ③ 決定事項がすぐに変更される事
- ④ 少しずつ着実に成長していく事
- ⑤ 明日のことは予想できない事

3 上下の漢字の関係が異なるもの

- ① 渡米 ② 帰宅
- ③ 洗顔
- ④ 入社
- ⑤ 乗馬

4 敬語の誤った使い方を含むもの

- ① くれぐれもお気をつけください。
- ② 先生にお目にかかれるのを楽しみにしています。
- ③ 私から直接お渡しいたします。
- ④ この電車にはご乗車できません。
- ⑤ こちらの書類ですね。拝見します。

ナ

ト

テ

ツ

5 活用の種類が異なる動詞

① 見る

② 切る

③ 起きる

④ 降りる

⑤ 生きる

二

IV

次の1〜5の傍線部と同じ漢字を含むものを、それぞれの選択肢の中から一つ選び、番号をマークしなさい。

1 旧来のやり方をボクシユするだけでは展望は開けない。

① シンボク会で交流を深める。

② 習字をするためにボクジユウを準備する。

③ 最近の政治家にはコウボクとしての意識が低い人が多い。

④ 社会の不正をボクメツしたい。

⑤ 彼女のジユンボクな人柄がすばらしい。

2 気宇ソウダイな構想をどうやって実現するか話しあう。

① 冒険家のソウキヨを祝福する。

② 雇用をソウシユツする。

③ 若手選手の起用がソウコウして勝利を収めた。

④ 走者イッソウのヒットを放つ。

⑤ セツソウなく意見を変える人間は信用できない。

ヌ

ネ

3 式典はできるだけだけカンソにしたい。

① 絵画教室でソビヨウの基礎を学ぶ。

② 幼馴染みといつの間にかソエンになってしまった。

③ お客様にソソウがないよう気を配る。

④ 無謀な計画が実行に移されるのをソシする。

⑤ 災害に対して適切なソチを施す。

4 早寝早起きをレイコウする。

① 夏休みには大学時代の友人と旅行するのがコウレイになっている。

② あのピアニストは文筆家としてもレイメイが高い。

③ 社員は会社にレイゾクするわけではない。

④ 両親のゲキレイに笑顔で応える。

⑤ レイギを尽くして海外からの賓客をお迎えする。

5 筋力が付いてきたので、少しずつツカを増やしていくことにする。

① このカダンな処置によって困難な状況を乗り切った。

② 彼のカクウの話をみんな信じこんでいた。

③ 現代の市場では少数の企業によるカセン化が進んでいる。

④ 注文していた本をニユウカしたという連絡が入った。

⑤ 彼は力のカゲンを知らない。

ノ

ハ

ヒ